セインズベリー日本芸術研究所所蔵
バーナード・リーチ旧蔵書コレクションについて

鈴　木　禎　宏

＜はじめに＞

1998年9月16日、ロンドンのナイツブリッジにあるオークション・ハウス、ボナムス Bonhams が "The Art & Influence of Asia including The Janet Leach Collection" と題する競売を行った。このタイトルに見えるジャネット・リーチ (1918-1997)はイギリスの陶芸家バーナード・リーチ Bernard Leach(1887-1979)の妻で、自身も陶芸家だった。彼女のコレクションには、彼女自身が収集したものばかりでなく、夫バーナードが彼女に遺した収集品(書籍や工芸品)が多数含まれており、バーナード・リーチ及び彼を中心とする一群の陶芸家(いわゆるリーチ派)が、20世紀のイギリス陶芸史・工芸史において果たした役割を考察する上で興味深い資料となっている。ところが1997年にジャネットが死去すると、彼女の遺産相続人の意向により、このコレクションは前述の競売に付され、散逸することとなった。

本稿で取り上げるのは、このオークションで売りに出されたジャネット・リーチ・コレクションの中の書籍類で、現在セインズベリー日本芸術研究所 (SISJAC: The Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures) に所蔵されているものである。セインズベリー日本芸術研究所は1999年1月1日に発足した研究機関であり、イギリスのロンドンとノリッジにオフィスがある。その設立の際には、イギリスの大手スーパーマーケット経営者で美術品蒐集家として知られるサー・ロバート・セインズベリー Sir Robert Sainsbury (1906-2000)とその妻レディ・リサ Lady Lisa が資金的援助を行った。セインズベリー夫妻はこの研究所設立のために、所有していたモディリアーニの<バラノフスキー侯の肖像>を手放し、その売上金を提供したのである。さらにセインズベリー夫妻は、1998年9月16日のボナムスのオークションにおいて、ジャネット・リーチ・コレクションの中から書籍33点75冊を購入し、これをセインズベリー日本芸術研究所に与えた。先に述べたように、この競売によってリーチ夫妻のコレクションは散逸したが、その中にあって33点の書籍が一括して購入されたことは、意義深いことと言わねばなるまい。ロンドン大学の SOAS (School of Oriental and African

Studies)のブルネイ・ギャラリー内にある同研究所の研究室において、筆者はこれらの書籍を閲覧する機会を得た。本稿はその調査報告である。以下、まずはセインズベリー日本芸術研究所が所有する、旧ジャネット・リーチ・コレクションの書籍のリストをあげ、その後で考察を加えたい。なお、文献のリストは基本的に著者名の五十音順ないしアルファベット順とする。また、各文献の末尾のにあるブラケットで囲まれた数字(例:[214])は、競売時のロット・ナンバーを示している。

＜セインズベリー日本芸術研究所所蔵旧リーチ蔵書＞

1) 荒川豊蔵『志野』朝日新聞社、昭和42年。[214]
2) 乾良明・林屋晴三編『日本の陶磁 現代篇 第二巻』中央公論社、1992年。[171]
3) 今泉篤男、乾良明『やきものの美 現代日本陶芸全集 第三巻 富本憲吉』集英社、昭和55年。[190]
4) 上村六郎『東方染色文化の研究 色料篇』第一書房、昭和8年。外箱に“R. Uyemura, Old Japanese pigments/colours Bernard Leach”と書かれている。また表紙には“Old Japanese artist's pigment”という書き込みがある。表紙見返しにBernard Leachのサインと Rokuro Uyemuraの名もある。巻頭に色見本があり、リーチはその一つ一つの脇に英語で色名を記している。[166]
5) 『金重陶陽追悼展図録』天満屋岡山店七階催場、1970年10月30日-11月4日。協賛出品者の中に濱田庄司の名が見える。[210]
6) 金原陶庁(金原京一)編著『絵唐津鑑賞図録』学芸書院、昭和15年。扉にリーチの書き込みがある:“E KARATSU/ Bernard Leach/1954/ one of the fine sources of Hamada's potting/ in its turn a reflection of Corean Ri cho”。(図版1参照)[212]
7) 『京都国立近代美術館所蔵品目録1 川勝コレクション 河井寛次郎』1983年。表紙見返しに“For Janet/thanking her for her good advice, from /Sarah and Alan/July 1983”というペンによる書き込み有り。[239]
8) 佐藤千尋、村山武編『古染付』求龍堂、1969年。1頁に次のような書き込み有り:“Mr Sato lived high up at Hakone where I visited him with his friend Toyotaro Tanaka whom I knew well as the Director of the Tokyo Mingei Kan (Folk Museum). This was his fine collection of Chinese blue & white porcelain made & exported for the Japanese Tea-masters. The brush-drawn line is both naïve and observantly refined. It seems to me a chapter of drawing by itself. / June 1970.”また次の頁には“BL from Sato Senju/ 12•5•69”という鉛筆書きと、「佐藤千尋」という毛筆の署名とがある。(図版2参照)[167]

（図版１）『絵唐津鑑賞図録』

（図版２）佐藤千尋、村山武編『古染付』

（図版３）『世界陶磁全集』外箱

9) 『世界陶磁全集』全16巻、河出書房新社、昭和33年。各巻には英語の小冊子(説明/supplement)あり。表紙にはタイトルの英訳が書き込まれている：第一巻 日本古代篇 PRIMITIVE JAPANESE; 第二巻 奈良・平安・鎌倉・室町篇 EARLY JAPANESE; 第三巻 桃山編 JAPAN TEA WARES; 第四巻 江戸篇 上 Early Tokugawa JAPAN; 第五巻 江戸篇 中 Mid Japanese/ Mid Japan; 第六巻 江戸篇 下 Late Japan/Late Japanese; 第七巻 茶器篇 Japan Tea Wares/ Old Japanese (Tea Wares); 第八巻 中国上代篇 Early Chinese Han etc.; 第九巻 隋唐篇 Tang; 第十巻 宋遼篇 Tang & N. Sung; 第十一巻 元明篇 Yuan & Ming; 第十二巻 清朝篇 附安南・タイ Ching Annam Siam/Swankalok; 第十三巻 朝鮮上代・高麗篇 Early Corean & Korai/ Korai & Prek; 第十四巻 李朝篇 Ri/ Corean Ri Dynasty; 第十五巻 海外篇 SUNDRY INTERNATIONAL; 第十六巻 現代篇 CONTEMP. 第3巻の後半と第8巻、第13巻はかなり参照された形跡がある。(図版3参照)[238A]

10) 瀬良陽介編『古伊万里染付図譜』京都平安堂書店、昭和34年5月。柳宗悦による序文あり。毛筆にて「瀬良陽介/バーナード・リーチ様/恵存」という書き込みあり。[164]

11) 田中作太郎、中川千咲編『原色日本の美術19 陶芸』小学館、1967年。[?]

12) 田中豊太郎『李朝陶磁譜』聚楽社、昭和17年7月。表紙見返しに毛筆で「バーナード・リーチ先生に贈る/田中豊太郎」、ペンにて "Bernard Leach 1953/ from Toyotaro Tanaka. 1953" という書き込みあり。背表紙が剥離している。図版の46と94がひきちぎられて失われている。[163]

13) 谷川徹三、川端康成監修『日本の陶磁 古代中世篇』中央公論社、昭和54年、6巻。外箱には英語で各巻のタイトルが書き込まれている。これらの本が刊行された時点でバーナード・リーチはすでに失明していたので、これらはジャネットによる書き込みだと思われる。[170]

14) 谷川徹三監修、水野九右衛門・吉岡康暢編『日本陶磁全集 7越前 珠洲』中央公論社、1976年。[?]

15) 『竹軒蔵品展観図録』大阪竹軒蔵品図録刊行会、昭和10年5月。非売品。裏表紙に「昭和10年6月9日 竹軒蔵品入札高値評 於大阪美術倶楽部」と書かれた紙が貼られている。陶磁器、絵画、屏風、茶道具等三九六点の写真が掲載され、写真下にペンでその値段が書き込まれている。[209]

16) 辻本勇『富本憲吉と大和』発行所リーチ、昭和47年新版。裏表紙に「1977. 2. 7. バーナード・リーチ氏に捧ぐ」という著者による献辞あり。[194]

17) 富本憲吉『窯辺雑記』文化生活社、大正14年。[195]

（図版4）『工藝』第25号

18) 富本憲吉『随筆集 陶器』朝日新聞社、1948年。表紙見返しにペンにて "To Janet from Ken. Tomioto" のサインあり。[186]

19)『富本憲吉陶器集 第壱冊』1933年。モノクロ写真による作品集。台紙に写真を貼ったもの。全二十部発行のうちの第四号。木製外箱には紙が貼ってあり、そこには "Kenkichi Tomimoto to B.L. His earlier work. Limited publication by actual photos" と書かれている。[182]

20) 富本憲吉『わが陶器造り』1952年初版。未定稿。表紙にインクで 'Tomi "My Potting"' の書き込みあり。状態やや不良。[193]

21) 日本民藝協会『工藝』[157, 172, 228, 229, 230]

- 第25号　昭和8年1月。スリップ・ウェア特集。表紙裏に目次の英訳がペンで書き込まれている。(柳宗悦の字だと思われる)。背表紙剥離。(図版4参照)
- 第29号　昭和8年5月。リーチ号。2冊あり。状態良し。
- 第44号　昭和9年8月。表紙裏に <Duplicasicts> という鉛筆書きあり。状態良し。
- 第46号　昭和9年10月。リーチ号。2冊あり。状態良し。
- 第53号　昭和10年5月。リーチによる英文エッセイが掲載されている。書き込みなどはなし。2冊あり。状態良し。
- 第56号　昭和10年8月。状態良し。
- 第59号　昭和10年11月。2冊あり。状態良し。

•第70号　昭和11年10月。日本民芸館特集。表紙裏にインクにて書き込みあり："(People's art museum) number/ Mingei Kwan/Komaba. Tokyo./ "Kogei" No. 70."。扉に " Illustrations are of things in the museum" という書き込みあり。巻頭に掲載された各図版の下に手書きのキャプションあり。順に :OTSUE; Guache Painting done in Japan by an unknown Dutchman; mask. 13th cent.; Corean Carving 18th cent.; Shino ware 17th cent; Seto ware [?] 18th cent; Corean-Ri Dynasty; Corean. Decorated with painted hora. (sic.) Ri Dynasty; Japanese iron kettle 18th cent.; Stone mill for hand grinding powder tea. Japanese; Front view of the Mingei Kwan; Front View; Front View; View from Yanagi's house; Safeway; side view; stair case and first floor.

22) 濱田庄司監修『沖縄の陶器』琉球電信電話公社、昭和47年5月。非売品。扉に "B.L. 1972" のサインあり。他は書き込みなし。[199]

23)『石拓 信濃の道神佛』社団法人信濃路発行、1972年6月。限定千部。序文濱田庄司、石拓森泉音三郎。石拓の十点セット。[215]

24)『濱田庄司七十七 盌譜』財団法人日本民芸館、昭和47年12月。[200]

25) 林屋晴三責任編集『日本の陶磁 古代中世篇』中央公論社、1974-75年、全14巻。[170]

26) 水尾比呂志編『現代の陶芸 第三巻』講談社、1975年。[220]

27) 李王家博物館『李王家博物館所蔵品写真帳』上•中•下巻、李王職発行、朝鮮総督官房総務局印刷所印刷、大正6年3月(第2版)。本文は日本語、前文は英語。また、各図版には日本語と英語でキャプションが付されている。上巻は総論、仏像、絵画を、中巻は陶磁器を、下巻は金工を扱う。総目次が上巻にある。上巻と下巻が保存状態良好であるのに対し、中巻は使い込まれており、何度も参照されたことを伺わせる。[160]

28) Bernard Rackham, *Catalogue of the Le Blond Collection of Corean Pottery*, Department of Ceramics, Victoria and Albert Museum, London, 1918. 表紙裏にペンで "Bernard Leach" のサインあり。かなり使い込まれている。[?]

29) G. St. G. M. Gompertz, *Korean Pottery & Porcelain of the Yi Period*, London: Faber and Faber, 1968. 表紙見返しにボールペンにて "BL. 1968" のサインあり。状態良好。書き込みなし。[162]

30) W. B. Honey, *Corean Pottery*, New York: Pitman Publishing Corporation. 表紙見返しに Alice Heckel というサインあり。著者 W. B. Honey はヴィクトリア•アンド•ア

ルバート美術館の陶芸部門の部長 (Keeper of the Department of Ceramics, Victoria & Albert Museum)。[?]

31) *Arte del Vasaio: The Three Books of The Potter's Art by Cipriano Piccolpasso (1524-1579) in the Oriental Italian, with Translation and an Introduction by Bernard Rackham F. S. A and Albert Van de Put,* published by Victoria & Albert Museum under the authority of the Boart of Education, 1934. 表紙裏に "The best always to you both [判読不能] 24.5.44" という書き込み有り。本文は英語とイタリア語。[216]

32) Shimaoka Tatsuzo, *Keramiken: Gisela Jahn und Anette Petersen-Brandhorst.* Stätische Kunsthalle, Manheim, 13 Juni-16 Aug 1987; Kunsthaus Lemperts, Köln, 9 Sep-3 Oct 1987. ドイツ語。展覧会図録。[240]

33) Muneyoshi Yanagi, *An English Artist in Japan*, 1920. 書き込みなし。状態良好。[249]

＜考察＞

以上に挙げた文献はバーナード・リーチとジャネット・リーチ両者の蔵書である。このうち、ジャネットの蔵書であることが明らかなのは:(2)、(3)、(7)、(13)、(18)、(25)、(32)の7点である。それというのも、これらの文献はバーナードの死後に出版されているか、あるいはジャネットへの献辞をもっているからである。よって、SISJACが所蔵する33点のうち、バーナード・リーチの旧蔵書であるものは、多くても25点であることになる。

全体を通じて言えることは、本文への書き込みが全くと言ってよいほどないことである。確かに見返しにはバーナード・リーチ本人のサインや著者の献辞が書かれていることもあるが、しかし筆者が確認した限りにおいては、本文に書き込みはないようである。

バーナード・リーチの旧蔵書を考えるうえで留意すべきことは、彼の日本語の能力である。バーナードは流暢な日本語を話し、時にはローマ字を用い日本語で手紙を認めることもあったが、しかし基本的には日本語の読み書きができなかった。だから、リーチの蔵書に日本語の文献が含まれていても、彼がその内容を理解していたとは考えられない。むしろ彼にとって重要だったのは、本に掲載されている写真や図版であっただろう。(ごくまれに、写真図版横に丸印などがかきこまれていることがある。)これらは彼が作品を制作する際の参考にした可能性がある。

例えば、(12) 田中豊太郎『李朝陶磁譜』は、図版の46と94がひきちぎられているうえ背表紙が剥離しており、バーナード・リーチがこれを参照して作品のデザインに役立てていた可能性を示している。また、(9)『世界陶磁全集』は、使い込まれている巻とそうでない巻との差がはっきりとみてとれる。特に第3巻の後半と第8巻、第13巻などは土埃が付着するなど汚れが目立ち、仕事場にて参照された形跡がある。そして、何と言っても、(27)李王家博物館『李王家博物館所蔵品写真帳』の中巻は、バーナードの作品の形態およびその変遷を論じる上で参考となる図版を含んでおり、とりわけ重要である。今回取り上げたセインズベリー日本芸術研究所の蔵書の中でも、最も重要なものであろう。これら3点の他に、本人が作品制作のための資料として購入したものとしては、(4)と(28)が考えられる。

次に考えたいのは、コレクションに含まれている献本類である。これらはバーナード・リーチの交友関係を示すものとして意義がある。例えば、(17)、(19)、(20)の3点は富本憲吉が友人リーチに贈ったものであろう。特に(19)は貴重なものである。また、(5)、(22)、(23)、(24)には濱田庄司の名前が見え、本人からリーチに献じられた可能性がある。さらに、これら濱田関係の3点に加えて(8)、(12)、(21)、(26)の4点は、リーチの民藝運動への関わりを考える際に参考になる。(21)は、リーチと初期民藝運動の関わりを物語るものである(参考として、『工芸』第42号26-27頁をみよ)。田中豊太郎は日本民芸協会の会長をつとめた人物である。その一方、(1)、(5)はリーチと民藝運動以外の日本人陶芸家の関わりを示唆するものとして注目される。(リーチは金重陶陽に会ったことがある。バーナード・リーチ「日本のやきもの」『月刊文化財』昭和41年9月。)この他に(10)、(16)も興味深い。蛇足ながら、(28)と(31)はリーチとヴィクトリア・アンド・アルバート美術館との関わりを窺わせる。

今回取り上げた33点の中で異色なのは、(15)『竹軒蔵品展観図録』であろう。ここにでている作品の一つ一つに値段がペンで書き込まれているのをみると、これはリーチが大阪で行われた売り立てで何かを購入した可能性を示しているように思われる。彼がイギリス人コレクター(例えばレナード・エルムハーストなど)の代理人として日本で美術品を購入したことがあるのは事実である。また、この売り立てが行われた昭和10年といえば、リーチが日本からイギリスに帰国した年であり、翌年に彼がロンドンの画廊 The Little Gallery にて "An Exhibition of Traditional Japanese Crafts" と銘打たれた展示即売会を開いたことも思い起こされる。子細は不明であるが、(15)はリーチの日本での作品購入活動を示唆するものとして興味深い。

改めて全体を見ると、セインズベリー日本芸術研究所が所蔵するバーナード・リーチの旧蔵書には、リーチ本人の著作は含まれていない。リーチの作品を論じたものとし

ては(2)や(26)があるが、ここでは立ち入らない。

以上に取り上げた文献が、今後のリーチ研究——作家論と作品論——に資することを期待して結びとしたい。